

ダウン症の小学6年の長女・静香さん(11)と歩いた10年の軌跡をまとめた『「ホーホー」の詩ができるまで』(出窓社、1300円税別)を、国立民族学博物館教授の信田敏宏さん(46)が出版した。(梅崎正直)

信田さんは東南アジアの研究者。2003年、妻知美さん(45)との間に静香さんを授かった。生後まもなくダウン症と診断され、しばらくの間は「将来、この子はどうなってしまうのか」と不安になったり、「何かの間違いでないか」と考えたりした。街中で、突然あふれそびた涙を、こらえぬこともあったという。

が、義父の「この子にはハンデがあるかもしれへんけど、どんなすばらしい人生が待っているか」といふ。

ダウン症長女と10年 本に

民博教授
信田さん

ゆっくりでも歩み着実

「かわからへん」という言葉に勇気づけられ、静香さんの関心が広がるよう、就学前からピアノ



信田さん(左)と静香さん。本の表紙は静香さんが描いたフクロウの絵だ(京都市で)

ノや英語などに親しむ機会を作ってきた。ピアノは、今では両手を使えるようになり、「進み方はとてもゆっくり。でも、しっかり身に付いている」と信田さん。

おしゃべりも得意になった静香さんは言葉への興味が強く、4年生の授業で初めて詩を作った。それが「ホーホー」の詩だ。

ホーホーとなきます。
パサパサととびます。
くらいところにいます。
さがしてみてね。
きょうのよる
まっています。

体力づくりのために親子で

くらし 家庭

よく散歩する京都御所で、夕方に聞いたフクロウのような鳴き声からイメージが広がったという。昨年、障害のある人がつづった詩と著名な芸術家らの絵などを組み合わせた「NHKハート展」に応募し、入選した。

著書の表紙の絵も、静香さんが描いたものだ。大好きなフクロウの周りには、ハートがいっぱい。飛ぶ生き物が好きなようで、「カラスやコウモリの絵も描きたい。詩も書きたい」と、静香さんはにっこり笑う。

信田さんは、「人間は誰もが困難なことを抱えているし、障害だって特別なことではない。ダウン症の子どもを持った若い親に、この本を読んで少しでも安心してもらえれば」と話している。